

ビカリア

化石は普通、地面の下の岩石の中に入っていて、私達の目には見えないことが多く、山のがけ、河床、採石場や道路の切割りなどで時々見る事ができるぐらいです。しかし、化石は過去の地球のようすを私達に教えてくれる実に貴重なものなのです。今月は、その化石の中でも富山県に縁の深いビカリアという巻貝の化石を紹介しましょう。

ビカリアは右の図のような化石で、現在生きている巻貝のウミナナの仲間とされています。貝殻は大きく、殻の表面には大小の棘状の突起や巻きの方向に平行な線（螺肋）があります。

ビカリアはアジア地域（インド、ビルマ、ジャワ、セレベス島、フィリピンなど）の新生代第三紀の始新世から中新世（今から約5300万年前～約1200万年前）の地層からでてくることがわかっています。日本では北の北海道から南は沖縄



× 1

ヤマトビカリア
(*Vicarya callosa japonica*)

までとその分布は広く、特に、中新世中期(約1600万年ぐらい前)の地層からたくさんでてきます。それらのなかでは、次の4種類が知られています。

- ビカリア カロサ ヤボニカ
・*Vicarya callosa japonica* (ヤマトビカリア)
ヤベイ ヨコヤマ イツオエンス
・*V. yabei* ・*V. yokoyamai* ・*V. yatsuoensis*

富山県の八尾地域からは、八尾の地名にちなんでつけられた^{ビカリア}*V. yatsuoensis*をはじめ、^{ビカリア・カロサ・ヤボニカ}*V. c. japonica*、^{ビカリア・ヨコヤマ}*V. yokoyamai*がでてきます。このほかにも、ビカリアに似ていますがやや小さい巻貝のビカリエラやセンニンガイの仲間、それに植物のフウの葉などの化石がでてきます。ビカリアやビカリエラは現在生きてはいませんが、センニンガイは熱帯のマングローブ湿地の暖かい汽水域(潟や河口域などの淡水と海水が混じったような水域)に現在も生きていますし、フウの木も亜熱帯から温帯までに分布し、今も台湾などに自生しています。そのころの日本は、ちょうど今のインドネシアやフィリピンのような多くの島々からできていたことも明らかになっています。このように、ビカリアといっしょにでてくる化石をあわせて考えると、富山県を含めてその当時の日本は現在の熱帯や亜熱帯のように気温が高く、当時の海岸にはマングローブがおい繁っていたのではないかと考えられます。



富山市科学文化センター

富山市西中野町3丁目1番19号 (〒930-11)

電話 富山(0764) 91-2123(代表)